

六才臼歯と乳歯のムシバの関係を調べるべく、第二乳臼歯と六才臼歯の関係を一学年の全員に付き調べてみた。

その結果表二(略)に示す如く一年生一三一名中、六才臼歯の虫歯を有するものが七一名あった。その中七〇名は隣接する第二乳臼歯がムシバであった第二乳臼歯が健全であったもの僅かに一名である。表二から六才臼歯のムシバと乳歯のムシバが如何に相関があるかと云う事がお分りと思う。

Ⅲ 六才臼歯の形成と乳幼児環境

歯の質が強いが弱いかと云う事と、虫歯の発生との間には、強い相関があるのであるが、その石灰化が出産時に始まり、五才位にまで完了するこの歯の場合は、特に幼児期の環境は、その質の良否と深い関係がある事は当然な事実である。そこで私共は、昭和二十三年に出生した七才から昭和二十五年に出生している二五才に至る間の年齢層一〇、二六七名の六才臼歯を歯科学的な細密検査を行った。その結果大平洋戦争中に幼児期を送った年齢層に歯の発育不全の発現が、目立って多い事を発見した。つまり昭和一八年出生の現年齢一才のもの、最も歯の発育不全が多く一三・四四% 土一・四四% であり、又昭和七年生れの二三才のもの、発育不全の発現は、六・二% 土一・一六で最も低かった。しかも、これらの差には統計的に有意性が認められたのである。以上を通して私は、幼稚園、保育園の歯科衛生が、永久歯のムシバの予防と云う観点からも、如何に大きな意義を有するかと云う事を今更痛感したのである。又幼稚園、保育園の歯科衛生指導は、単に口腔の清掃等の躰をつけるだけにとどまらず、小児の食生活を通じて偏食の矯正、間食の指導、正しい栄養指導等を是非行つて欲しい。単にムシバ予防と云う消極的な面のみでなく、強い歯の型造りにも協力していたゞける場としての幼

稚園保育園の歯科衛生的意義を皆様に深く認識していただきたい。

小諸市さくら保育園に於ける保育歯科活動

(子供を虫歯から守ろうという活動)

日本保育歯科協会 山 田 茂

小諸市さくら保育園に於ける保育歯科活動の実際をスライドによつて供覧したが、これに就いて少しく説明を加えたい。学期の初めに我々は保育園々長を中心に職員、嘱託歯科医、PTA代表によつて構成された保健委員会を持ち、こゝで口腔衛生教育に関する年間計画を立てた。我々の口腔衛生に関する目標を、1. 口腔清掃の習慣形成、2. よくかむ習慣の形成、3. 進んで口腔検査を受け、進んでムシ歯の治療を受ける態度を養うこと、4. 甘いものを食べ過ぎない態度を養うこと、5. 歯の役目を理解させること、等である。この目標を達成するために次のような活動を行った。

- 1 朝の観察。こゝでは身体の清潔と一緒に口の中がきれいに保たれているかどうかを毎朝検査する。
- 2 給食の際よくかむ訓練をし、食後にはうがいの練習をさせる。
- 3 年三回定期検査を行つて、ムシ歯が何本あるというだけでなく、初発部位やその進行方法を検査する。
- 4 口腔検査と一緒に齶蝕活動性試験を行つて、ムシ歯の進行状態の速さを判定する。
- 5 間食の調査を行つて、甘いものだけを食べている子供の問食を

改める。

6 子供はどうしてムシ歯の治療を嫌がるかを調査してその対策を立てる。

7 ムシ歯の早期治療をはかる一方法として、子供のムシ歯の一覽表を作って、治療した子はすぐ解るようにする。(ムシ歯の数だけ汚れた色で○を書き、治療したものは桃色でその上に花を書く)

——心理的考慮。

8 歯痛で泣いたり休んだりする子供のある場合は、その機会を捕えて治療した後とを比較して、治療の大切なことを認識させる。

9 給食時、ムシ歯の多い子供の食事が他の子供より遅くなる場合その機会を捕えて治療を受けることが大切であることを教える。

10 小学校に進んだ子供にも年三回以上保育園に来て検査を受けさせる。又口腔衛生の行事の時は園児と一緒に行事に参加させる。

11 この外歯医者ごっこをして進んで口腔検査を受け、治療を受けるよう指導する。

12 子供の一人一人について母親とどうしてムシ歯を防ぐか、治療を受けさせるかについて相談をする。

以上の活動の結果、ムシ歯の治療を嫌がる子供は減少し、治療成績が上昇した。(小諸市とその附近の保育園や幼稚園と比較すると、治療を嫌がる子供は本園では全体の三分の一強であり、ムシ歯がある子の七〇%が治療を受けている。)又沈んだ孤独な子供がムシ歯の治療を受けてから快活な子に変わった数例を見た。

然し、治療をいやがる子供、どうしても治療を受けない子供は若干あり、保育園では全員歯ブラシを使用するのに、家では歯をみがかず、間食後うがいをしないう子供は若干あり、今後の研究課題として残されている。

児童外傷の長期統計とそ

の分析による児童の体質

傾向 (第一報)

長野県保育専門学院 小松 卓郎

従来より外傷を通して災害事故及び災害事故頻発性素質者乃至は之に関する諸問題を追究する業績は、内外共に幾多のものが報告されてはいるが、之を体質との関連に於いて系統的に究明したものは、ひとり小坂教授門下の時崎博士の成人に於ける業績をみるのみであり、児童期に於けるものは未だその例をみない。児童に於ける災害事故が年毎に上昇し、今や死亡原因の上位を占める現在では、之が系統的な外傷調査は、それ自体教育の場に少なからざる意義を齎らすものと思われる。殊に受動的に記録された外傷のみならず、日常放置看過されているあらゆる微外傷——それは要因的に大外傷と何等撰ぶところのない——を長期に涉り、綿密に捕捉したものは未だ報告をみず、亦かかる調査にしてはじめて児童外傷の全貌を把握しうるものと思われる。かかる調査は、日夜児童に接する全教職員と父兄との携まざる努力を俟たずして得る事は困難であり、且亦之に関連せる体質傾向の追究も、これ等両者と共に長期に涉り、児童の健康管理に従事せる校医の協同なくしては困難の問題である。今日、如何なる方法を以てしても、単一の方法のみで体質を決定しうるものはない。これは血沈反応の消長がそれ自体結核の消長を意